

麦穂だより

第46号

発行 武蔵野手打ちうどん保存普及会川崎
事務局 川崎市宮前区初山 1-12-26-3 門井孝一
ホームページ URL (<http://musashinoudon.dokkoisho.com/>)

2013年 10月
Tel.044-975-7609

麦と薯

会長 北條 秀衛

『150kgに挑戦』

2反(600坪)の畑を借りての壮大な麦づくり(農林61号)の最後のクライマックスは6月9日(日)であった。

前年の11月に蒔いた小麦は冬場の麦踏みを経て一面の緑から、今は、麦秋として黄金色に輝いている。晴天が続いている。これなら、刈取りから脱穀までの一連の作業が一挙にできる。絶好のチャンス到来である。うどん仲間、畑仲間に一斉集合をかける。事前取材申込みのあった地元テレビ局と新聞にも声をかける。三々五々集まってきた人々が、早速麦を刈取り、束を作り始める。黒川から軽トラに乗せられて脱穀機

が到着。刈取る人、束にする人、束を運ぶ人、脱穀する人、ワラを片付ける人、流れ作業である。



働き手はおよそ15人。昼前には作業終了となった。思ったより早かった。テレビと新聞から早速取材を受ける。

「収穫量はどのくらいですか」

通常小麦は1反で5俵から6俵(米より少し少ない)と言われている。1俵60kgであるから300kg~360kg。2反では10俵~12俵(600kg~720kg)である。「150kgぐらいじゃないですか」脱穀された麦の大袋が



6つ。1つ30kgぐらいありそうである。

次ページへ続く ➡

「初めての収穫としてはまあまあじゃないですか」 答えながら自問自答してみた。実際に作付けした面積は1反（他に1反はさつまいもを既に植付けていた。また残りにはじゃがいも、ネギ等の栽培を行った）プロが作れば300kgは最低収穫するだろうが、我々は素人、発芽後にカラスに芽を抜かれた被害を考えると、その半分の150kgが目標であった。また、この量があると我々の講習会1年分を賄うことができ

るのである。

目標達成「150kg」そう答えてしまったが、現実にはそんなに甘くなかった。その後、製粉を順次行っているが、最終的には粉としては80kgぐらいになりそうである。しかし、味は正真正銘、まざりっけなしの地粉であり、大変美味であった。来年は、作付面積を増やし、カラス対策をきちんとして目標を達成したい。

『うどん塾（第2期）』

うどん塾第1期は好評のうちに終了し、そのままうどん会に入会してくれた方も数名いた。新しい仲間が増える。素直に嬉しいことである。

今年も新たな仲間を求め、うどんの普及という崇高な目的を追求して「うどん塾第2期」を開催することになった。多くのマスコミが募集記事をのせてくれた。大変感謝している。おかげで今回は神奈川県下各地から多数の申し込みがあった。初めてのことである。定員オーバー、嬉しい悲鳴が上がる。抽選で落とすべきか、落とさざるべきか。ハムレットの心境である。

当日、混乱することを承知で全員においていただくことにした。うどん会が支部として発足した当時は、会員は約100名ほどで、うどんの道具を小平の本部から借りての講習会であった。その当時の運営を思い出すとともに、社会経験豊富な会員の叡智を終結すれば何とかなるだろうとの判断である。

神奈川県下に武蔵野手打ちうどんが広められる。その誘惑に勝てなかったが、塾生、会員、役員、全ての人の協力でこの難関を乗り切りたい。全員仲間なのである。

活動報告（前号以降）

- 6月29日（土） 平成25年度第1回うどん講習会 高津高等学校
午前 13名 午後 5名 役員 13名
- 7月24日（水） 麻生福祉センターうどん講習会
- 7月26日（金） 18:00～ 役員会及び暑気払い 於；青葉（溝口） 参加12名
- 8月21日（水） うどん塾準備打合せ 総合自治会館 役員3名
- 9月21日（土） 指導者養成講習会・道具の点検整備 麻生ゆうゆう広場 参加14名

小麦の価格



相談室長 中島常雄副会長

〔質問〕 今年の4月に引き続き、10月からもまた円安のため小麦が値上がりすると新聞にありました。小麦の価格はどう決まるのですか。また農林61号への影響はあるのでしょうか。

＜回答＞

日本で消費される小麦の殆んど、90%弱が輸入品です。一般的に言えば、輸入品の市場価格は、原産地相場、為替相場、輸送費用などの変動によって上下します。円安は当然輸入原価を引き上げます。

しかし、これが小麦の国内価格の値上がりに関係するかどうかと言うと、複雑な事情があります。小麦の輸入は国家貿易と呼ばれる制度によって、政府が行っています。政府が買い付けた小麦を、特定の価格で民間の実需者（主に製粉会社）に売り渡すのです。


売り渡し価格は、輸入価格にマークアップと呼ばれる金額を上乗せして決められます。

輸入価格は産地買い付け価格や輸送費用などの言わば常識的な費用価格ですが、マークアップは政府管理経費と国内産小麦の生産

振興対策に充当する、とされていて、いわば政策的な上乗せ分です。

今年10月の改訂売り渡し価格は、5銘柄平均トン当たりあたり57,260円、4月売り渡し価格の54,990円に比べて4.1%の値上げになっています。このマークアップ額は約17千円とされています。

一方国産小麦は、これまでの規制が緩和されて、市場流通の方向に進んでいますが、それでもなお、生産者代表、需要者代表、行政の三者によって構成される民間流通促進協議会が設置され、ここで播種前に入札によって売買契約が行われて、言わば指標的な価格が決められるなど、相当に強い流通コントロールが行われています。

次ページへ続く 



6月29日講習会①



6月29日講習会②

こう言った事情からすれば、輸入小麦の政府売り渡し価格が国内産小麦価格に与える影響というよりは、一連の小麦に対する政策の方向が、農林61号を含む国産小麦の価格動向に影響する、とした方がよいようです。

ちなみに、国産小麦の価格は、品種、生産地によって大きな差があり、最近の入札価格で、最高は北海道産“春よ恋”でトン当たり97,815円、最低が茨城県産“さとのそら”が30,546円です。

農林61号は、埼玉県産が38,282円、国産小麦の価格ランキングでは中位と言うところでしょうか。尤も同じ農林61号でも、滋賀県産は50,610円、愛知県産45,177円、岐阜県産43,096円で産地によってずいぶん違ってきます。

何れにせよ、小麦の流通には行政の関与が大きいのですが、これには「食糧管理法」(昭和17年)以来の流れがあります。

これは、戦時の逼迫した食料需給に対処するために制定されたものです。生産された主要食料の強制買い上げを行う供出制度、消費者に購入量を割り当てる配給制度。全面的な国家行政による食料需給の管理を定めたものでした。戦後、需給が緩和するにつれて、ゆっくりと規制が緩和されて来たのです。

もともと食料需給には、そのバランスが崩

れると、価格の乱高下が起こり易く、さらにはそれが大きな社会的混乱を引き起こす危険性があります。

日本は大正7年、米騒動と呼ばれる大暴動が起こり、警察力では対応できず、軍隊を動員して、ようやくこれを鎮圧するという大事件がありました。これに続いて大正9年には、米価が大暴落して、激しい農村恐慌が始まりました。

主要食料について消費者に対して、その安定供給を計ること、一方ではその生産者の保護を行うことが、行政の重要課題であることが、事実によって明示されたのです。

そのことの重要性は、原理的に現在でも変わりはありませんが、大きな状況変化があります。戦後の経済発展の結果として、食料の海外市場からの購入が容易になったために、安定供給の側面は後退しました。一方、農業生産の生産性の違いや、労賃水準の格差などによる農産物の内外価格差が国内市場に対する値下げ圧力として作用します。そのため食糧政策は、生産者保護の面が強くなっていくようです。

政策批判は、いろいろありますが、経験的にも、また原理的にも、安易に市場任せとは出来ないようです。

ウドンウドンウドンウドンウドンウドンウドンウドン **あとがき** ウドンウドンウドンウドンウドンウドンウドンウドン

お恥ずかしい限りですが、6月29日の講習会の日に、水の量を勘違いで少なくしすぎた失敗例です。
(細田)

